



東京証券取引所
ロンドン駐在員事務所
アンナ・ヒル

—連載（第6回）—

エジンバラ、金融の街としての歩み



■ 1. はじめに

本年9月18日（木）、スコットランドでは、イギリスからの独立を巡り住民投票が行われた。その結果は僅差ながら、独立反対が多数を占め、今後も現体制が継続されることになった。今後は、イギリス政府がスコットランドに対して行った「公約」をどのように履行していくかが重要になってこよう。

ここでは今般の独立の是非には触れることはしない。

本稿では、ここロンドンのシティ（City）において、スコットランドと言えば、金融の街「エジンバラ」を思い浮かべる人が多いと思うが、そのエジンバラ（Edinburgh）が金融の街となったか、その背景を考えてみたい。

■ 2. エジンバラの位置環境

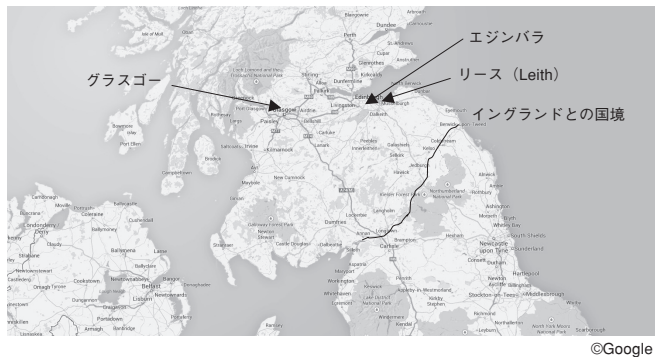
スコットランドには、エジンバラの他にグ

ラスゴーという大都市がある。ここではグラスゴーの発展経緯については説明を割愛させて頂くが、エジンバラがグラスゴーやスコットランドの他の都市と比較して優位であった点は、イングランドの国境が近かったことと、そして、エジンバラ近郊にリース（Leith）という港が近くにあったことという好条件が揃っていたことである。特に、後者は、イングランドのみならず、北欧諸国との貿易が可能となりエジンバラの発展に大いに貢献した（注1）。

■ 3. イングランド・スコットランド合邦以降のエジンバラ

(1) イングランド・スコットランド合邦当時のエジンバラ（18世紀初め）

エジンバラのあるスコットランドは、1707年の連合法（Act of Union）によって、それまで別々の王国であったイングランド王国とスコットランド王国は合邦し、そして、グレ



ートブリテン王国となったことで、現在のイギリスの初期の形ができあがった。

1700年初めのエジンバラは、人口が約3万5,000人で、現在の約48万人と比べても格段に小さい町であったが、当時のエジンバラ市内は、その数百年前からの姿のまま狭く込み合い汚い街として有名であった。その町の中では、貧富を問わず様々な人が暮らし、路上、広場などでマーケットを開き、遅しく生活していたようである（注2）。

(2) 新市街の建設及び都市の発展（18世紀半ばから19世紀初め）

18世紀の終わりから、スコットランドでは、人口は田舎から都市へ移動し始め、1811年には、エジンバラとグラスゴーは共に10万人を超えた。

エジンバラでは、上述の過密問題及びそれに起因すると思われる疫病の問題を解決するべく、1752年、従前の街（現在の旧市街）に隣接する形で、新しい街（新市街）をゼロから建設する計画を立てた。その後、新市街が

一定程度完成すると、イングランドに去っていた貴族や富裕層がエジンバラに戻るようになった。エジンバラの街は、道も公園も家も広く、現代的で清潔な町に変わり、エジンバラを訪れた人々からは「贅沢の拠点」と呼ばれた程だった（注3）。富裕層に続き、中流階層も新市街に移り始めたほか、メインストリートの商店では高級商品が売られるようになった。また、近くの鉄工場などでも仕事が増加し、雇用が産み出され、1825年には人口が15万人になった。

当時、グラスゴーやその他の町でも同程度の人口増加はあったが、エジンバラは他と違って、移動してきたのは比較的に給与の高い人々であったため、エジンバラはスコットランドで最も中流階級率が高いと言われる町になった（注4）（注5）。また、このことがその後、エジンバラが金融の中心地になるための基礎になったと言われている。



(3) 財政悪化とそれに伴う一時的停滞 (19世紀半ば)

18世紀の終わりは、イングランドで産業革命が始まった時期である。その100年以内にイングランド全土、欧州そして米国にも波及し、各国で産業構造の大幅に変革をもたらしたが、スコットランドは、その波及を抑制する2つの要因があり、他の国・地域から遅れをとった。

1つ目の要因は、スコットランド政府の財政悪化であった。1799年、スコットランド政府は港町の利益を拡大させるべく、Leithの港を改善するプロジェクトに大規模に投資がされた。しかし、そのプロジェクトは18年間もかかり費用が予算を大幅に上回って要したほか、プロジェクト自体、計画通りの効果が得られず、1833年、スコットランド経済は財政破綻状態となってしまった。

2つ目の要因は、鉄道の整備に遅れであった。イングランドでは1820年には鉄道が幅広く利用できるようになっていたのに対し、スコットランドでは、エジンバラとグラスゴーを結ぶ路線の完成すら1838年までかかり、エジンバラとイングランドを結ぶ路線に至っては1846年まで完成されなかった^(注6)。

このような要因が足かせとなり、スコットランドの産業構造の変革は、1860年頃からようやく始まるのであった。しかし変革の速度も遅く、1900年ぐらいまで段階的に行われていった。

さらに、産業革命の波及効果は、スコット

ランド全体でみると、北部と南部で不均衡なものであった。容易に想像できるように、北部のハイランドではほとんど波及効果が現れなかった。

南部に位置するエジンバラは、19世紀後半からようやく産業構造が変わり始め、Mid Lothian地区では、鉄工場に続いて、炭、紙、繊維などの工場が建設されるようになった。これに伴い、資金需要は高まり、エジンバラでは金融業務の拡大に結びついていった。

(4) 金融業界の発展 (19世紀後半)

Mid Lothian地区が発展し始めたこの時期、エジンバラにはNew Townが建設された。そこには、エジンバラが低迷していた時期にそこを離れていた貴族が戻ってきたほか、新たな中流階級も出現するようになり、人々の貯蓄や投資に対するニーズが高まったことから、それに対応する金融機関の成長のきっかけとなった。

スコットランドの労働者階級でも、平均賃金はイングランドを下回っていたものの、従前と比較すれば賃金自体が上昇したことから、この頃ぐらいから、家族との娯楽のために金銭支出をしたとしても^(注7)、貯蓄を行えるようになったと言われている。

(5) 主要金融機関の登場

19世紀は、現在でも主要なプレーヤーとして活動を続ける金融機関がエジンバラに誕生した時期でもあった(以下は、設立順)。



① バンク・オブ・スコットランド (Bank of Scotland)

バンク・オブ・スコットランド（以下、スコットランド銀行）は、スコットランドで最も歴史が長い銀行で、1695年7月、スコットランド政府によって設立された。設立当初、株主はスコットランドの政治家及び商人からなる172人（うち36人はロンドンベース）であった。1696年に欧州で初めて紙幣を発行した。本社は現在に至るまでエジンバラにある。2001年以降、様々な変遷をたどり、2009年にロイズ・バンキング・グループとなった。

② ロイヤル・バンク・オブ・スコットランド (Royal Bank of Scotland : RBS)

1728年、国王令でロイヤル・バンク・オブ・スコットランドがエジンバラで設立された。当銀行が設立される前は、銀行業務はスコットランド銀行が独占的に行っていた。RBSは、その設立以降スコットランド銀行と激しく競争を行っていくこととなる。英政府は2008年以降、金融危機を受けて経営難に陥ったRBSを救済するため455億ポンドの公的資金を注入した。現在でも政府が同行株式の82%を保有している。

③ スコティッシュ・ウィドウズ (Scottish Widows)

1815年、スコティッシュ・ウィドウズは、スコットランド初の生命保険会社として設立された。夫や家族を亡くした際の女性の安心を目的として設立されたが、後に、年金や貯金商品も発行するようになった。本社は現在

に至るまでエジンバラにある。2009年、完全にロイズ・バンキング・グループとなった（注8）。

④ スタンダード・ライフ (Standard Life)

1825年、スタンダード・ライフは「The Life Insurance Company of Scotland」という名称で設立され、1832年に「The Standard Life Assurance Company」に名称変更した。スタンダードライフは、19世紀終わりにはスコットランド以外に広く業務展開するようになった。2006年6月、ロンドン証券取引所に上場。本社は現在もなおエジンバラにある。

■ 4. 20世紀以降のエジンバラ

20世紀は、1960年までは、スコットランドの金融機関の顔ぶれについては、小規模の銀行がイングランドの銀行に合併された事例はあったものの、大規模な買収等はいわれず、大きな変動は見られない時期であった。しかし1960年代に入ると、銀行業務関連の規制が緩和され、銀行がクレジットカードの発行業務などを行えるようになったことから、銀行間の競争は激しくなった。この結果、1960年代の終わりにはスコットランドの主要銀行は6行から3行になった（その2行は現在エジンバラに本社がある（注9））。

1970年代に入ると、北海油田がスコットランド沖で発掘、生産可能となったことで、そ



れに関する産業資金等が必要となり、これに伴う金融関連業務は非常に活発となった。

エジンバラは、1986年、スコティッシュ・ウィドウズと共同で金融機関が集積する地区を新しく建設する計画を立て、市内中心から西方に3万6,500平方メートルの用地を開発対象として、スコティッシュ・ウィドウズは9万3,000平方メートルのオフィスビルを建設した。新しい金融地区は「The Exchange」という名前が付けられ、そこには国際会議場が作られ、その周りに数多くの金融機関が移動し、2005年には最後の開発が終わり、現在、エジンバラの金融センターとして機能している（注10）。

最後に、一般的に英国の第2の金融の街と認識されるエジンバラも、ZYENグループの世界金融センター指数（Global Financial Centres Index）では、2007年に最高位の第15位を記録して以降、順位を落とし、本年3月は64位となってしまった。同指数は国際性、集積する金融機関数など、様々な尺度で測ったもののようで、アセットマネジメント業務に強みがあると言われるエジンバラを、その順位だけで評価をすることは難しいところだが、金融危機以降も同じ英国のロンドンには常にトップ争いをしているだけに、エジンバラにとって順位の更なる低下は看過できないものであろう（注11）。

独立に対して「No」の結論を下したスコットランドにおいて、今後、金融センターとしてエジンバラがどのように歩んで行くの

か、その歩みが注目される。

（注1） Lenman, Bruce, “Economic History of Modern Scotland, 1660-1976”, Batsford, 1977.

（注2） http://www.bbc.co.uk/history/british/civil_war_revolution/scotland_edinburgh_01.shtml

（注3） Lythe, S.G.E., “Economic History of Scotland, 1100-1939”, Blackie, 1975.

（注4） http://www.bbc.co.uk/history/british/civil_war_revolution/scotland_edinburgh_01.shtml

（注5） Lenman, Bruce, “Economic History of Modern Scotland, 1660-1976”, Batsford, 1977.

（注6） Lenman, Bruce, “Economic History of Modern Scotland, 1660-1976”, Batsford, 1977.

（注7） W.W. Knox, “A history of the Scottish People : Summary of Economy and Society in Scotland 1840-1940”, www.scran.ac.uk

（注8） <http://www.lloydsbankinggroup.com/Our-Group/our-heritage/our-history/bank-of-scotland/bank-of-scotland/>

（注9） http://www.scotbanks.org.uk/banking_history.php

（注10） <http://www.cala.co.uk/group/news/newsitem.aspx?id=483>; <http://www.scotsman.com/news/jobs-bonanza-as-city-s-finance-district-plans-163-50m-expansion-1-1070954>

（注11） <http://www.scotsman.com/business/scots-cities-slide-down-chart-of-the-world-s-top-financial-centres-1-2182954>; http://www.longfinance.net/images/GFCI15_15March2014.pdf

